

2021年人間発達学部附属子育て支援センター活動報告

宮内 孝
野村 宗嗣
金子 幸
早川 純子

はじめに

子育て支援センターは、2010年4月の人間発達学部開設と同時に整備した3つの附属機関の一つである。これまで、学生の学びを深め実践力をつけながら地域貢献を行う拠点として、様々な子育て支援活動を実施してきた。活動内容は、「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」「子育てひろば みなみん」「心理サポート」の5つである。そのうち「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」は開設当初から、「子育てひろば みなみん」は1ヶ月のトライアルを経て2015年5月から、「心理サポート」は2016年9月から継続実施している。「子育て支援室」は、臨床発達心理士の資格をもつ学部教員が地域住民を対象に子どもや子育てに関する心理相談を受ける活動である。「チャレンジ運動教室」は体育専門の学部教員と学生ボランティアが、運動の苦手な子どもたちとその保護者に運動遊びを提供する活動である。「あそびの教室」は美術専門の学部教員と学生ボランティアが、地域の子どもとその保護者に工作を通じた親子遊びを提案する活動である。「子育てひろば みなみん」は非常勤保育士と学生ボランティア、そして学部教員により、地域の未就園の乳幼児と保護者を対象として交流の場の提供と育児相談を行う活動である。「心理サポート」は学部教員が障害のある子どもと保護者を対象としてコミュニケーションや姿勢・動作への支援を行う活動である。

「子育て支援室」と「あそびの教室」については、2020年度以降の実施を見合わせている。前者は、臨床発達心理士の資格をもつ担当教員が不在となったこと、後者は新型コロナウイルス感染拡大による自粛が理由である。

以下は、2021年度「人間発達学部附属子育て支

援センター」の活動内容である。

1. チャレンジ運動教室

(1) ねらい

幼児・児童の体力・運動能力は、低下傾向を示している。この問題を解決する一助として、「チャレンジ運動教室」を2010年から継続的に開催している。この12年間の申込者合計は2429名であり、154回の教室を開催している。5歳から8歳までの4年間にわたって継続的に参加する子どもは少ない。

参加する保護者と子どものそれぞれのねらいは、下記の通りである。

・保護者……子どもと一緒に運動を楽しみながら、子どもの心身の発育発達の様子を観察したり、それぞれの動きの指導法を身に付けたりする。そして、この教室をきっかけに、運動遊びを楽しむ時間を子どもに設定しながら、子どもの心身の発育発達を促す。

・子ども……運動遊びの楽しさやできない動きができる楽しさを味わいながら、多様な基本的な動きを身に付ける。この楽しさを動機付けとして、日常生活のなかで運動遊びに取り組む意欲と態度を育てる。

(2) 令和3年度の教室の概要

① 参加申込者：126名

- ・幼児（5、6歳）とその保護者 29組
- ・小学校1、2年生とその保護者 43組

② 教室開催回数：13回

- ・前期の部 6/5、6/12、6/26、7/3、7/17、7/3（6回）
- ・後期の部 10/23、10/30、11/6、11/20、11/27、12/4、12/11（7回）

③ 教室の内容

本教室では、特定の動きの習熟を意図する「動きの洗練化」ではなく、多様な動きの習得を意図する「動きの多様化」を目指している。本年度に取り組んだ運動遊びは、下記の通りである。

a) 移動系の遊び

・信号ゲーム・オセロゲーム・長縄跳び・バルーン・しっぽ取り・壁おに 等

b) 操作系の遊び

・ゴミゴミボール遊び・バトンスロー・ボール投げ遊び・新聞紙遊び 等

c) 姿勢制御運動系の運動

・マット遊び・跳び箱遊び・鉄棒遊び・ダンス・人間オセロ・綱引き 等

④ 子ども教育学科学生の参加者：のべ270名

宮内ゼミに所属する3、4年生が、担当教員から事前指導を受けて、本教室の企画・運営そして運動指導の中心を担う。1、2年生は、子どもとかかわりながらゼミ生の運動指導のサポートを行う。

当初は、子どもへの説明・指示がままならなかった学生が、子どもたちや保護者を対象とした運動指導ができるようになる。この経験は、教師に必要な実践的な力量形成に寄与している。

(3) 今後の課題

- ・系統的な類似の運動経験ができるような指導プログラムを開発する。
- ・本教室に参加する学生の学びを明らかにして、本学科のカリキュラム開発に寄与できるようにする。

2. 子育てひろば「みなみん」

子ども教育学科附属子育て支援センターの取り組みの一環として子育てひろば「みなみん」を実施している。地域の子育て家庭を支援すること、また、学生が乳幼児とその保護者とかかわりを学ぶ機会を作ることを目的に、定期的に開催を続けている。活動は7年目になるが、令和2年3月から令和3年10月までは新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から実施を見合わせてきた。今回は、令和3年11月と12月に実施した活動につい

て報告をする。

(1) 実施の概要

① 実施回数：計4回

開設時間は午前10時から12時までである。実施日の詳細は以下の通りである。

11月	17日(水)、24日(水)
12月	8日(水)、18日(土)

② 利用者数

実施した計4回で、利用した保護者の人数は延べ32人、子どもの人数は延べ37人であった。実施したいずれもメール、または、学科の公式Instagramからの事前予約をお願いし、参加をしていただいた。

③ 参加学生

参加学生については、4年生がボランティアとして企画運営に参加をし、2月18日(土)に関しては、ボランティアの学生に加え、子育て家庭支援論受講の3年生が参加をした。

④ 運営スタッフ

これまで子育て支援センターのパート保育士の方を中心にボランティア学生と共同で運営を行ってきたが、今回は、新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いていた時期に急遽実施を決めたため、教員1名と学生ボランティアのみで運営をした。

(2) 取り組みの実際

今回の実施は約1年7か月ぶりであったことから、まずは、ボランティア学生を中心に環境の準備から始めた。特に、乳児が口に入れることがある遊具に関しては丁寧に消毒を行った。その後、これまでのボランティア学生が書き記した実践ノートを基に活動を振り返り、当日のお楽しみ会の内容を考え、練習に取り組んだ。

今回は、新型コロナウイルスに対する取り組みとして、密を避けることを目的に各回10組程度の参加者を事前予約により募集をした。募集方法としては、大学HPへ案内を掲載したり、近隣の子育て支援センターへの開催案内の送付をしたりして、地域の子育て家庭への情報発信を行い、担当

教員宛のメール、または、学科公式のInstagramにて予約を募集した。また、Instagramでは、活動後の様子も公開し、初めて参加する人でも安心できるような情報を発信するよう努めた。

事前予約では参加する親子の氏名に加え、子どもの年齢も記していただくようお願いをした。この効果として、12月18日(土)は、3歳以上児の参加申し込みも目立ったため、活動場所を屋外に移し、3歳未満児が安全に遊べるような工夫も事前に計画し、実践することができた。

計4回の活動ではあったが、過去の活動に参加をしてくれていた方が再び参加をしてくださったり、卒業生が親となり子どもを連れて参加をしてくれたりなど、開催して良かったと感じる取り組みであった。

活動の流れは以下の通りである。

9:30～	学生集合 →環境構成(受け入れ準備、掃除等)、
10:00～	親子の受け入れ →受付、子どもの名札を作成
11:30～	お楽しみ会 →パネルシアター、ペープサート、 からくり絵本、わらべうた 等
12:00～	片付け

(3) 今後の課題

昨年に引き続き、今年も新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から定期的な開催をすることができなかった。しかし、感染状況が落ち着いている時期に開催を計画すると積極的に活動に取り組むボランティア学生が多数集まり、意欲的に企画運営に取り組んでくれたことから、大学内に学びの場があることの意義を再確認できた。また、開催を見合わせている期間が長かったにも関わらず、開催の案内を出すとすぐに地域の親子が申し込みをしてくれたことから、地域の子育て家庭から必要とされている実感を得ることができた。

引き続き、本活動の目的である「地域の子育て家庭を支援すること」、「学生が乳幼児とその保護者とのかかわりを学ぶ機会を作ること」が達成できるよう、活動を継続運営していきたい。そのた

めにも、まだ、活動に参加をしたことがない現1・2年生に向けて活動の実際を紹介しながら、計画を立案していきたいと考えている。

5. 心理サポート

活動内容については、本研究誌にて、別途記載する。

おわりに

人間発達学部附属子育て支援センターの活動について2021年度の取り組みを報告した。人間発達学部による地域貢献活動の一環として、それぞれの活動が地域の子どもとその保護者を対象とし、各教員の専門性を活かした取り組みとなっている。学生と教員、そして地域が一体となって様々な活動を行うことで、大学と地域が融合した子育て支援が実現されていると言えるのではないだろうか。

前年度に続き2021年度も新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から一部の活動を自粛したり、内容を縮小することとなった。コロナ禍にあっても地域の子育て支援を継続し、子どもの育ちを支援する学びのフィールドとしての機能を維持することができた。次年度は、感染状況を見極めながら休止中の取り組みの再開や活動内容の復元を図り、学生の学びの深化と地域支援の充実化を図っていきたい。